

所有についての弁証法の戯画化

「……（エンゲルス「空想から科学へ」？から）……マルクスには、こう述べられている。『これは否定の否定である。この否定の否定は個人的所有を再興するが、しかし、資本主義時代の獲得物を基礎として、すなわち、自由な労働者の協業、ならびに、土地と、労働そのものによって生産された生産手段とにたいする彼らの共同所有にもとづいて、それを再興するのである。自己労働に立脚する個々人の分散的な私的所有が資本主義的な私的所有へと転化するの、もちろん、事実上すでに社会的な生産経営に立脚している資本主義的な私的所有が社会的所有へと転化するのよりも、はるかにながながしい、苦しい、困難な過程である。』〔『資本論』第一巻、第二四章、第七節、803~804 ページ〕これで全部である。だから、収奪者の収奪によって作りだされた状態は、個人的所有の再興、だが土地と、労働そのものによって生産された生産手段との社会的所有を**基礎としての再興**と、名づけられているのである。だれでもドイツ語のわかる人にとっては」（そして、ミハイロフスキー氏よ、ロシア語のわかる人にとっても。というのは、この翻訳はまったく正確なのだから）「この意味は、この社会的所有とは土地とその他の生産手段とにかんするものであり、また、この個人的所有とは生産物すなわち消費対象にかんするものである、ということである。そして、事がらを六才の児童にでも理解できるようにするために、マルクスは五六ページ〔前掲書、第一章、第四節、八四ページ（ロシア語版、三〇ページ）〕に、『共同の生産手段をもって労働し、自分らの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由人たちの団体』、すなわち社会主義的に組織された団体を想定して、こう言っている。『この団体の総生産物は社会的な生産物である。この生産物の一部は、ふたたび生産手段の役にたつ。この部分は**ひきつづき社会的なものとしてとどまる**。ところが、べつの一部は、団休員たちによって生活手段として消費される。**それゆえ、この部分は、彼らのあいだに分配されなければならない**』。そして、これは、とにかく、デューリング氏のヘーゲル化した頭にさえ、十分に明白であるとおもう。

個人的であると同時に社会的な所有や、この混乱した雑種形体や、このヘーゲル弁証法から生まれざるをえないつじつまのあわないものや、この朦朧世界や、マルクスが彼の門人たちにそれを解くことをまかせている、この深遠な弁証法的ななぞや——これらは、またしてもデューリング氏の自由な創造であり想像である。……」

第一巻 「人民の友」とはなにか P167~168

コメント

この部分は、レーニンがミハイロフスキーの誤りを指摘するために、デューリングによる同様な歪曲に対しマルクスの言葉をもってエンゲルスが反論したものであり、社会主義社会における生産手段の社会的所有と生活手段の個人的な所有について述べたものです。